



TITLE:

吉田城先生略年譜・吉田城先生業績目録 (吉田城先生追悼特別号)

AUTHOR(S):

CITATION:

吉田城先生略年譜・吉田城先生業績目録 (吉田城先生追悼特別号). 仏文研究 2006, S: 9-36

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138080>

RIGHT:



故 吉田城先生 近影

吉田城先生略年譜

- 1950年10月 21日、東京に生まれる
- 1963年 3 月 千代田区立番町小学校卒業
- 1966年 3 月 千代田区立麹町中学校卒業
- 1969年 3 月 都立日比谷高校卒業
- 1969年 4 月 京都大学文学部入学
- 1973年 3 月 京都大学文学部卒業（仏語学仏文学専攻）
- 1973年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程入学（フランス文学専攻）
- 1975年 3 月 同修士課程修了
- 1975年 4 月 同博士課程進学
- 1975年10月 フランス政府給費留学生 パリ第四大学博士課程、および高等師範学校ユルム校 Ecole normale supérieure de la rue d'Ulm 入学
- 1978年11月 パリ第四大学博士課程修了、第3課程博士号取得
- 1979年 4 月 大阪大学言語文化部専任講師
- 1981年 4 月 京都大学教養部助教授
- 1981年 5 月 小場瀬研究奨励賞（日本フランス語フランス文学会）受賞
- 1982年 7 月 京都大学文学部助教授
- 1984年10月 1985年10月までの1年間フランスに滞在。国立東洋語学校 Institut National des Langues et Civilisations Orientales (INALCO) にて教鞭をとる
- 1991年 2 月 パルム・アカデミック（学術功労章）シュヴァリエ級（フランス政府）受章
- 1991年 4 月 1992年1月まで文部省在外研究員としてフランスに滞在
- 1994年 4 月 京都大学文学部（のち大学院重点化により、文学研究科）教授
- 1999年11月 パルム・アカデミック（学術功労章）オフィシエ級（フランス政府）受章
- 2005年 6 月 24日、逝去 享年54歳

吉田城先生業績目録

I. 著作

1. 単著

『神経症者のいる文学 — バルザックからブルーストまで』名古屋大学出版会、1996年。

『対話と肖像 — ブルースト青年期の手紙を読む』青山社、1994年。

『「失われた時を求めて」草稿研究』平凡社、1993年。

2. 共著・編著

『日仏交感の近代 — 文学、美術、音楽 —』宇佐美斉編著（共著）京都大学学術出版会、2006年。

『テキストからイメージへ — 文学と視覚芸術のあいだ』（吉田城編著）京都大学学術出版会、2002年。

『アヴァンギャルドの世紀』宇佐美斉編著（共著）京都大学学術出版会、2001年。

『週刊朝日百科 世界の文学 「失われた時を求めて」ほか』64号（責任編集、総論、ブルースト解説、図版解説、小百科項目執筆）朝日新聞社、2000年10月8日。

Équinoxe n° 17/18 : numéros spéciaux « Écriture / Figure », Actes du Colloque franco-japonais à Kyoto en 1998 (co-organisateurs : G. Schaeffer, Y. Oura, W. Marx, H. Usami et A.-M. Christin), Rinsen Book, printemps 2000.

『ブルースト全集 別巻（研究編）』（岩崎力、保苅瑞穂、吉川一義との共編・翻訳・注・年譜作成）筑摩書房、1999年。

Équinoxe n° 16 : numéro spécial « Génétique littéraire » (sous la direction de Jo Yoshida et Kazuhiro Matsuzawa), Rinsen Book, printemps 1999.

Index général de la Correspondance de Marcel Proust (édité par Kazuyoshi Yoshikawa, Jo Yoshida et alt.), Presses de l'Université de Kyoto, 1998.

『象徴主義の光と影』宇佐美斉編著（共著）ミネルヴァ書房、1997年。

『文学をいかに語るか 方法論とトポス』大浦康介編著（共著）新曜社、

1996年。

Équinoxe n° 2 : numéro spécial « Marcel Proust » (sous la direction de Jo Yoshida), Rinsen Book, 1988.

3. 辞典編纂・項目執筆

『ロワイヤル仏和中辞典』（改訂版・CD-ROM版）旺文社、2005年。

Dictionnaire Marcel Proust (sous la direction de Annick Bouillaguet et Brian Rogers), [rédaction de 40 articles], Champion, 2004.

『ロワイヤル和仏辞典』（改訂版）旺文社、2002年。

『世界文学大事典』（項目執筆）集英社、1996-1998年。

『ロワイヤル・ポッシュ仏和・和仏辞典』（共編著）旺文社、1988年。

『ロワイヤル仏和中辞典』（共編著）旺文社、1985年。

『プチ・ロワイヤル仏和中辞典』（共編著）旺文社、1985年。

4. 校訂

『芥川龍之介全集第23巻 日録・講演メモ 他』（編集協力）岩波書店、1998年。

『芥川龍之介全集第22巻 未定稿II』（編集協力）岩波書店、1997年。

Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu* [sous la direction de Jean-Yves Tadié], Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome I (*Combray ; Noms de pays : le nom*, établissement des brouillons manuscrits, notes et éclaircissements, notices, résumés), 1987.

Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, Robert Laffont, « Bouquins », tome II (établissement du texte de *Le Côté de Guermantes*), 1987.

『プルースト書簡全集』原装復刻版全26巻編纂 (*Correspondance et souvenirs de Marcel Proust* / Collection sous la direction de Jo Yoshida) 臨川書店、1985年。

5. 語学教材

『教養のためのフランス語』（吉田典子との共著）大修館書店、1991年。

Emile Zola, *Edouard Manet* (注釈版) 青山社、1989年。

Ⅱ. 学位論文

- 『「失われた時を求めて」草稿研究』、京都大学・論文博士（新制/文/225）、1994年。
- « Proust contre Ruskin : la genèse de deux voyages dans *À la recherche du temps perdu* d'après des brouillons inédits », thèse de doctorat de 3^e cycle (Université de Paris IV-la Sorbonne), 2 volumes, 1978.

Ⅲ. 研究論文

2006年

- 「木下杢太郎とフランス文化」、『日仏交感の近代 ―文学、美術、音楽―』（宇佐美斉編著）京都大学学術出版会、2006年、pp. 48-78。

2005年

- 「プーローニュの森のスワン夫人 ― プルースト的身体のねじれと二重性 ―」、科学研究費補助金研究成果報告書『フランス文学における身体 ― その意識と表現』（研究代表者 吉田城）、2005年3月、pp. 31-44。
- 「フィアスコ プルーストと性的失敗」、科学研究費補助金研究成果報告書『フランス文学における身体 ― その意識と表現』（研究代表者 吉田城）、2005年3月、pp. 147-161。
- 「ヴェネツィアと死の表象 ― シャトーブリアン、バレス、プルースト（続き）」、『流域』55号（printemps 2005）青山社、2005年、pp. 50-57。
- 「ボドメル博物館所蔵プルースト新資料に見る「スワン家の方へ」推敲過程」、『フランス語フランス文学研究』第85・86合併号、日本フランス語フランス文学会、2005年3月、pp. 273-291。
- « Ce que nous apprennent les épreuves de *Du côté de chez Swann* dans la collection Bodmer », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 35, 2005, pp. 31-45.

2004年

- 「テキストの深海を探る ― 生成の起源から未来へ ―」、『日本近代文学』第70集、2004年、pp. 109-116。

- 「ヴェネツィアと死の表象 — シャトーブリアン、バレス、ブルースト」、
『流域』54号 (automne 2004) 青山社、2004年、pp. 30-35。
- 「芥川龍之介における異文化受容 — 明治開化期のイメージ」、『人文知の
新たな総合に向けて』21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多
元的人文学の拠点形成」京都大学文学研究科、第二回報告書IV、2004年、
pp. 273-293。
- « Le Martyre de Saint Sébastien et Marcel Proust », *Marcel Proust 4*,
“Proust au tournant des siècles”, Minard, 2004, pp. 161-174.
- « Fascination et assimilation : Proust lu par Roland Barthes », *Barthes.
Résonances des sens*, bulletin of University of Tokyo, Center for
Philosophy, vol. 2, avril 2004, pp. 31-40.
- « La quête de la Mère chez Nerval, Proust et Akutagawa », *Nerval ailleurs*
[Actes du Colloque Gérard de Nerval « Clartés d'Orient »], Université de
Paris VIII ; Laurence Teper, 2004, pp. 247-268.

2003年

- 「ブルーストの草稿研究」『岩波講座 文学 1 テキストとは何か』岩波書
店、2003年、pp. 145-164。

2002年

- 「喘息とマルセル・ブルースト — 失われたプネウマを求めて」『現代文学』
ブルースト特集号、2002年12月、pp. 20-33。
- 「マルセル・ブルーストと中世芸術の出会い ラスキんに学んだもの」『テ
キストからイメージへ — 文学と視覚芸術のあいだ』（吉田城編著）京
都大学学術出版会、2002年、pp. 3-55。
- 「聖セバスチアンの殉教のエロティスム ダヌンツィオ、モンテスキウ、
ブルースト」『テキストからイメージへ — 文学と視覚芸術のあいだ』
（吉田城編著）京都大学学術出版会、2002年、pp. 187-231。

2001年

- 「医術と社交術 — ブルーストの『失われた時を求めて』に見る医師コタ
ールの肖像 —」科学研究費補助金研究成果報告書『美学と病理学』（研
究代表者 岩城見一）、2001年3月、pp. 265-278。
- 「ブルーストの草稿を読む — ニジンスキーの登場をめぐる」『ユリイカ』

特集ブルースト、2001年4月、pp. 134-141。

「ブルーストからポール・モランへ — 新しい文学形式を求めて」『アヴァンギャルドの世紀』（宇佐美斉編著）京都大学学術出版会、2001年、pp. 285-319。

« Édition des textes littéraires du XX^e siècle au Japon », *Études de langue et littérature françaises*, Société des études de langue et littérature françaises de l'Université de Kyoto, n° 32, 2001, pp. 149-158.

« Les nouvelles et les formes brèves chez Proust, Morand et Akutagawa — autour de plusieurs récits courts », *Études de langue et littérature françaises*, Société des études de langue et littérature françaises de l'Université de Kyoto, n° 32, 2001, pp. 135-148.

« Maladie et mort de la grand-mère : quelques réflexions génétiques », *Marcel Proust 3*, “Nouvelles directions de la recherche proustienne 2” (Rencontres de Cerisy-la-Salle, juillet 1997), Minard, 2001, pp.75-91.

« L'École japonaise de recherches sur la littérature française : le cas de Marcel Proust », *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, n° 53, mai 2001, pp. 47-59.

2000年

「ゴンクール兄弟における病の心理学 — 『ジェルミニ・ラセルトゥー』と『娼婦エリザ』」、科学研究費補助金研究報告書『フランス文学における心と体の病理 — 中世から現代まで —』（研究代表者 吉田城）、2000年3月、pp. 127-149。

「『聖セバスチアンの殉教』のエロティスム — ダヌンツィオ、モンテスキウ、ブルースト」科学研究費助成研究報告書『フランス文学における心と体の病理 — 中世から現代まで —』（研究代表者 吉田城）、2000年3月、pp. 169-205。

« Sur les rêves de la grand-mère dans les “Intermittences du cœur” », *Sodome et Gomorrhe. Marcel Proust* [sous la direction de Michel Erman], Ellipses, coll. “Lettres”, 2000, pp. 101-109.

« Proust et les Ballets russes : autour de Nijinski », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 31, 2000, pp. 51-64.

« Remarques sur les manuscrits d'Akutagawa — autour des avants-textes de Hina », *Équinoxe* n° 17/18, Rinsen Book, printemps 2000, pp. 213-219.

- « La réception de Marcel Proust au Japon », *La Réception de Proust à l'étranger*, Institut Marcel Proust international, 2000, pp.25-42.

1999年

- 「プルーストとコクトー：飛行の詩学」『仏文研究』30号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、1999年、pp. 145-164。
- « Marcel Proust et Léon Bakst — une révélation des Ballets russes », *Bulletin de la société franco-japonaise d'art et d'archéologie* n° 19, 1999, pp. 4-24. (日本語要旨付)
- « Genèse de l'ouverture : Rashômon d'Akutagawa », *Équinoxe* n° 16, Rinsen Book, 1999, pp. 134-145.

1998年

- 「盗人の誕生 — 『羅生門』推敲プロセスに関する一考察」『文学』岩波書店、第9巻・第4号、1998年、pp.102-111。
- 「ある文明開化のまなざし — 芥川龍之介『舞踏会』とピエール・ロティ」『仏文研究』29号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、1998年、pp. 119-128。
- 「フローベールの文法美 — プルーストの視点から」名古屋大学シンポジウム報告書『今こそフローベールを読み返す』（松澤和宏編）、1998年、pp. 31-45。
- « Sur quelques images de l'agonie chez Marcel Proust », *Équinoxe* n° 15, Rinsen Book, 1998, pp. 54-65.

1997年

- 「神話と寓意の魅惑 — ギュスターヴ・モローを見るプルースト」『京都大学文学部紀要』36号、1997年、pp. 1-54。
- 「神話の変貌 — フランスの作家はモローをどう見たか」『象徴主義の光と影』（宇佐美斉編）ミネルヴァ書房、1997年、pp. 10-24。

1996年

- 「テキスト生成論」『文学をいかに語るか 方法論とトポス』（大浦康介編著）新曜社、1996年、pp. 52-68。
- 「パステイーシュ」『文学をいかに語るか 方法論とトポス』（大浦康介編

著) 新曜社、1996年、pp. 332-346。

« La question de l'hérédité chez Marcel Proust — une comparaison avec le système de Zola », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 27, 1996, pp. 79-89.

1995年

「『谷間の百合』における神経症の^{ロンド}輪舞 (下)」『流域』40号 (automne 1995) 青山社、1995年、pp. 32-39。

「『谷間の百合』における神経症の^{ロンド}輪舞 (上)」『流域』39号 (renouveau 1995) 青山社、1995年、pp. 20-26。

1994年

「ブルーストと模作 — フローベールの文体模写をめぐって —」『仏文研究』25号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、1994年、pp. 149-179。

「ブルーストの見た戦争下のパリ — 千夜一夜物語の世界」科学研究費補助金助成研究成果報告書『フランス文学におけるパリ — 中世から現代まで —』(研究代表者 田村毅)、1994年、pp. 45-58。

「リジウの闇夜 — プラウト、ラスキン、ブルースト」『流域』37号 (été 1994) 青山社、1994年、pp. 60-64。

「リジウの闇夜 — プラウト、ラスキン、ブルースト」『流域』36号 (hiver 1993/94) 青山社、1994年、pp. 49-56。

1993年

「エドヴァルト・ムンクと『叫び』の世界」『流域』34号 (printemps 1993) 青山社、1993年、pp. 44-55。

「ジェリコーの『狂人画』をめぐって」『流域』33号 (hiver 1992/93) 青山社、1993年、pp. 54-64。

1992年

« La maladie nerveuse chez Proust : genèse du portrait du docteur Du Boulbon », *Bulletin Marcel Proust*, n° 42, 1992, pp. 43-62.

« Proust et la maladie nerveuse », *Marcel Proust 1*, “À la recherche du temps perdu : des personnages aux structures”, Minard, 1992, pp. 101-119.

- « Sur les trois jeux de dactylographies de la “mort de la grand-mère” : un aspect du processus de la correction et du montage chez Marcel Proust », *Équinoxe* n° 9, Rinsen Book, août 1992, pp. 63-74.
- « La grand-mère retrouvée : le procédé du montage des “Intermittences du cœur” », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 23, 1992, pp. 43-64.

1991年

- 「小説の誕生 — <コンプレー>の生成過程 II」『京都大學文學部紀要』30号、1991年、pp. 1-96。

1990年

- 「<対話と肖像> アントワヌ・ビベスコ」『流域』29号 (automne 1989) 青山社、1990年、pp. 49-57。
- 「小説の誕生 — <コンプレー>の生成過程 I」『京都大學文學部紀要』29号、1990年、pp. 1-85。
- 「澁澤龍彦と死の博物誌」『澁澤龍彦 回想と批評』幻想文学出版局、1990年、pp. 115-125。
- 「都市空間とテキスト — プルーストとその時代」科学研究費補助金助成研究成果報告書『都市と文学 バリ、リヨン、ヴェネツィア』（研究代表者 吉田城）、1990年、pp. 1-51。

1989年

- 「<対話と肖像> リュシアン・ドーデ (続)」『流域』27号 (automne 1989) 青山社、1989年、pp. 59-64。
- 「<対話と肖像> リュシアン・ドーデ」『流域』26号 (printemps 1989) 青山社、1989年、pp. 46-53。

1988年

- 「テキストの生成学 プルーストの手稿をめぐって」『文学』岩波書店、1988年、pp. 24-36。
- 「<対話と肖像> レーナルド・アーン」『流域』25号 (automne 1988) 青山社、1988年、pp. 55-64。
- 「<対話と肖像> アンナ・ド・ノアイユ II」『流域』23号 (hiver

1987/88) 青山社、1988年、pp. 56-64。

« Proust lecteur d'Anna de Noailles », *Équinoxe* n° 2, Rinsen Book, 1988, pp. 181-196.

1987年

「欲望と挫折の軌跡 — <コンブレ>秋の散歩の成立過程」『ユリイカ』
総特集ブルースト、1987年、pp. 220-229。

「<対話と肖像> アンナ・ド・ノアイユ I」『流域』22号 (automne
1987) 青山社、1987年、pp. 48-53。

「<対話と肖像> ロベール・ド・モンテスキウ」『流域』21号
(renouveau 1987) 青山社、1987年、pp. 56-64。

« Un extrait inédit du *Temps perdu* », *Équinoxe* n° 1, Rinsen Book, 1987, pp. 85-90.

« L'après-midi à Venise : autour de plusieurs textes inédits sur la basilique
Saint-Marc », *Cahiers Marcel Proust* 14, Gallimard, 1987, pp. 167-189.

1986年

「1874年の上流生活点描 — 『最新流行』をめぐって」『ユリイカ』特集ス
テファヌ・マラルメ、1987年9月、pp. 156-169.

「肉体の祝祭 — モーリス・ベジャールと三島由紀夫」『ユリイカ』特集三
島由紀夫、1986年5月、pp. 199-205。

「1893年の書簡体小説 下」『流域』19号 (été 1986) 青山社、1986年、pp.
48-52。

「1893年の書簡体小説 上」『流域』18号 (hiver 1985/86) 青山社、1986年、
pp. 25-31。

1985年

「『失われた時を求めて』の新校訂版をめぐって」『流域』16号
(renouveau 1985) 青山社、1985年、pp. 51-64。

「<対話と肖像> マリー・ノードリンガー」『流域』15号 (hiver 1984/85)
青山社、1985年、pp. 51-64。

1984年

「<対話と肖像> エドガール・オーベール」『流域』14号 (renouveau

1984) 青山社、1984年、pp. 54-64。

「＜対話と肖像＞ ダニエル・アレヴィ」『流域』13号 (hiver 1983/84) 青山社、1984年、pp. 55-64。

「＜対話と肖像＞ アナトール・フランス」『流域』12号 (été 1983) 青山社、1984年、pp. 55-64。

1983年

「＜対話と肖像＞ アルフォンス・ダルリュ」『流域』11号 (printemps 1983) 青山社、1983年、pp. 33-42。

« Métamorphose de l'Église de Balbec — un aperçu génétique du “voyage au Nord” », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 14, 1983, pp. 41-61.

1982年

「ブルーストと性的風景」『ガリア』大阪大学文学部フランス文学研究室、XXI-XXII、1982年、pp. 332-341。

「ブルーストの手紙から」『流域』10号 (arrière-saison 1982) 青山社、1982年、pp. 52-53。

« Genèse du “Voyage à Venise” dans *À la recherche du temps perdu*, III », 『人文』京都大学教養部、1982年、pp. 11-57。

1981年

「バルベック教会の原型 (II) — ブルーストとアミアン」『流域』6号 (automne 1981) 青山社、1981年、pp. 41-64。

「バルベック教会の原型 (I) — ブルーストとバイユー」『流域』5号 (été 1981) 青山社、1981年、pp. 52-64。

« Genèse du “Voyage à Venise” dans *À la recherche du temps perdu*, II — Ruskin et Proust », 『言語文化研究』大阪大学言語文化部、1981年、pp. 93-105。

« Inventaires des Cahiers 32 et 27 », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 12, 1981, pp. 47-51, 53-56.

1980年

「＜車窓の夜明け＞の4つの草稿 — モチーフの増殖と変貌」『ガリア』大阪大学文学部フランス文学研究室、XX、1980年、pp. 35-42。

- « Genèse du “Voyage à Venise” dans *À la recherche du temps perdu*, I »,
『言語文化研究』大阪大学言語文化部、1980年、pp. 131-146。
« Genèse de la “relecture de Bergotte” dans *À la recherche du temps perdu* », *Études de Langue et Littérature françaises*, n° 36, 1980, pp. 114-131.

1978年

- « La Genèse de l'Atelier d'Elstir à la lumière de plusieurs versions inédites »,
Bulletin d'informations proustiennes, n° 8, 1978, pp. 15-28.
« Note pour la reconstitution des Cahiers de brouillons », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 7, printemps 1978, pp. 29-31.

1977年

- « Relecture du “Carnet de 1908” » (travaux de collaboration), *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 6, automne 1977, pp. 17-28.

Ⅳ. 翻訳

- 『ブルースト評論選2 芸術篇』保刈瑞穂篇 [「移ろいゆくものの帝王」(pp. 276-283) 及び「美の教師」(pp. 284-308)] ちくま文庫、2002年。
ミシェル・シュネデル『ブルースト 母親殺し』白水社、2001年。
ミシェル・エルマン『評伝マルセル・ブルースト』青山社、1999年。
『ブルースト全集別巻 ブルースト研究・年譜』(共訳・年譜作成) 筑摩書房、1999年。
『ブルースト全集18 書簡Ⅲ』(共訳) 筑摩書房、1997年。
『ブルースト全集17 書簡Ⅱ』(共訳) 筑摩書房、1993年。
クシシトフ・ポミアン『コレクション — 趣味と好奇心の歴史人類学』(吉田典子との共訳) 平凡社、1992年。
『ラスキン＝ブルースト 胡麻と百合』筑摩書房、1990年。
『ブルースト全集16 書簡Ⅰ』(共訳) 筑摩書房、1989年。
ジェローム・デュアメル『世界毒舌大辞典』大修館書店、1988年。
「記憶の中のブルースト」[レーナルド・アーン、ロベール・ブルースト、フィリップ・スーポー、ジャン・コクトー、モーリス・サックス、ロベール・

- ル・ドレフュス、エドモン・ジャルーによる回想録抜粋]『ユリイカ』総特集ブルースト、1987年、pp. 16-30。
- アロイジュス・ベルトラン「スカルボ」『言語』大修館書店、1984年5月号、pp. 8-9。
- アンヌ・ユベルスフェルト「演劇空間とその表現」『文学』岩波書店、1984年1月号、pp. 87-98。

V. 口頭発表（1999年以降）

- « La logique du camouflage : la pseudo-autobiographie chez Proust », Colloque franco-japonais « L'Écriture de moi : à qui s'adresse l'autobiographie ? », Institut franco-japonais du Kansai, le 16 avril 2005.
- 「木下空太郎とフランス文化Ⅱ」京都大学人文科学研究所・宇佐美班「日仏交渉史」、人文科学研究所、2004年11月22日。
- « La jeune NRF et son refus d'À la recherche du temps perdu », 京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム第35班第2研究班「異文化体験とフランスの作家・芸術家」第3回国際フォーラム « La critique au début du XX^e siècle », 京都大学、2004年9月25日。
- 「19世紀オリエンタリズム文学 — テオフィル・ゴーチエ」京都大学文学研究科21世紀COEプログラム第35班第2研究班「異文化体験とフランスの作家・芸術家」第6回研究会「物語論からオリエンタリズムへ」（「帝国システムの政治・文化的比較研究」グループとの共催）、京都大学、2004年10月9日。
- « Le fiasco : la splendeur et la misère du désir proustien », Forum « Marcel Proust 2004 », Université de Kyoto, le 24 juillet 2004.
- « Autour de fragments tardifs de Swann : la scène de Mme Swann au Bois », Colloque « Manuscrits de Proust : approches critiques et problèmes éditoriaux », La Maison franco-japonaise de Tokyo, le 16 juillet 2004.
- 「ヴェネツィアと死のイメージ シャトーブリアン、バレス、ブルースト」京都大学文学研究科21世紀COEプログラム第35班第2研究班「異文化体験とフランスの作家・芸術家」第4回研究会「死と医学」、京都大学、2004年4月10日。
- « Ce que nous apprennent les épreuves de *Du côté de chez Swann* dans la

collection Bodmer », conférence à l'ITEM, le 17 mars 2004.

「木下杢太郎とフランス文化」京都大学人文科学研究所・宇佐美班「日仏交渉史」、人文科学研究所、2003年12月20日。

「プルーストを読むバルト」関西プルースト研究会、京都大学、2003年12月6日。

« Fascination et assimilation. Proust lu par Roland Barthes », Colloque international Roland Barthes, Université de Tokyo, le 29 novembre 2003.

「ボドメル博物館所蔵プルースト新資料に見る「スワン家の方へ」推敲過程」日本フランス語フランス文学会秋季大会、大阪外国語大学、2003年10月26日。

「テキストの深海を探る—生成の起源から未来へ」日本近代文学会（招待講演）、早稲田大学、2003年9月27日。

« La digestion et l'indigestion chez Proust », Colloque international « Proust sans frontières »(国際シンポジウム「境界なきプルースト」), Université de Kyoto, le 18 septembre 2003.

「芥川作品に見る明治開花期のイメージ」ジュネーヴ大学文学部（日本語による講演）、2003年3月27日。

「消化と不消化—プルースト的<癒し>の可能性」関西プルースト研究会、京都大学、2002年12月7日。

「芥川龍之介におけるフランス文学の受容—旧蔵書、ジャポニザンへの視線、斬首幻想」京都大学人文科学研究所・宇佐美班「日仏交渉史」、人文科学研究所、2002年11月9日。

« L'Étoffe des héros : Le héros vaincu. Figures de la mort violente en Europe et au Japon », Sciences-Politiques, le 25 juin 2002.

« Question de la Mère chez Nerval, Proust et Akutagawa », Colloque Gérard de Nerval « Clartés d'Orient », Université de Paris VIII (Musée d'archéologie de Saint-Denis), le 21 juin 2002.

「プルーストと喘息」関西プルースト研究会、京都大学、2001年12月15日。

「呼吸と身体—プルーストと喘息」科学研究費助成研究「フランス文学における身体—その意識と表現」第1回シンポジウム、京都大学、2001年10月20日。

「短編小説論—プルーストの「バルダサール・シルヴァンドの死」を中心に」関西プルースト研究会、同志社大学、2001年3月31日。

« Édition des textes littéraires du XX^e siècle au Japon (en comparaison de

- l'édition de la Pléiade de Proust) », Colloque « Manuscrit, édition, informatique », Université de Paris IV-la Sorbonne, le 23 mars 2001.
- « Les nouvelles et les formes brèves chez Proust, Morand et Akutagawa — autour de plusieurs récits courts », Université de Paris III (conférence dans le séminaire de Pierre-Edmond Robert), le 21 mars 2001.
- « L'École japonaise de recherches sur la littérature française : le cas de Marcel Proust », Le 52^e Congrès de l'Association internationale des Études françaises, École Normale Supérieure, rue d'Ulm, le 4 juillet 2000.
- « La réception de Marcel Proust au Japon », Les premières rencontres de l'Institut Marcel Proust International, Bibliothèque Nationale de France, le 28 janvier 2000.
- 『『聖セバスチアンの殉教』とマルセル・ブルースト』関西ブルースト研究会、京都大学、1999年12月18日。
- 「ブルーストの見たバレエ・リュス」日仏美術学会第84回例会、京都大学文学部、1999年7月17日。
- 「ブルーストとヴァスラフ・ニジンスキー」関西ブルースト研究会、京都大学、1999年3月27日。
- 「バレエ・リュスの衝撃 — レオン・バクストとブルースト」京都大学人文科学研究所、1999年3月15日。
- 『『文法美』とは何か。ブルーストの見たフローベールの文体』シンポジウム「今こそフローベールを読み直す」、名古屋大学、1998年12月12日。
- 「飛行の詩学 コクトーとブルースト」京都大学人文科学研究所、1998年3月23日。
- 「ブルーストにおける臨終のいくつかのイメージについて」関西ブルースト研究会、京都大学、1997年12月13日。
- « Maladie et mort de la grand-mère : quelques réflexions génétiques », Cerisy-la-Salle (Colloque “Nouvelles orientations des recherches sur Marcel Proust”), le 4 juillet 1997.

Ⅵ. エッセー・対談

- 「バレエからさぐるフランス文学 世紀末の踊り子たち — ドガのまなざし、ヴァレリーの思索」『鑑賞者のためのバレエ・ガイド』音楽之友社、2004

- 年、pp. 140-142。
- 「フランスに見る「チューリップ狂時代」」京都大学文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」TRANS（「翻訳の諸相研究会」Newsletter）n° 5、2003年11月14日、pp. 6-7。
- 「文学とバレエ 交錯するジャンル」『鑑賞者のためのバレエ・ガイド』音楽之友社、2003年4月、pp. 172-174。
- 「芥川龍之介旧蔵書にみるフランス文学の痕跡」京都大学文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」TRANS（「翻訳の諸相研究会」Newsletter）n° 1、2003年2月28日、pp. 2-3。
- 「草稿を読むおもしろさ」『知のたのしみ 学のよろこび』（京都大学文学部編）岩波書店、2003年、pp. 18-22。
- « Les proustiens de l'École japonaise » (version mise à jour), *Le Magazine littéraire*, "Proust" hors série, 2001, pp. 112-113.
- 「プルーストとドゥミ＝モンデーヌの華麗な世界（深井見子との対談）」『DRESSTUDY（服飾研究）』39号、京都服飾文化研究財団、Spring 2001、pp. 18-25。
- 「忘れえぬページ — 井上究一郎先生を偲んで」『流域』48号（hiver 1999/2000）青山社、2000年、pp. 60-62。
- 「古書店めぐりの日々 — 亡き父の思い出 —」『文學藝術』23号、共立女子大学総合文化研究所神田分室、1999年、pp. 96-98。
- 「トランプの王様（亡き父の思い出）」*Unicorn Journal*、n° 43（spring 1999）文英堂、1999年、pp. 35-36。
- 「プルースト国際シンポジウムに参加して」『流域』44号（automne 1997）青山社、1997年、pp. 2-5。
- 「生活をともしするクロック — 一九九六年夏、スリジー＝ラ＝サルで」『流域』43号（hiver 1996/97）青山社、1997年、pp. 8-11。
- 「大美術館の誕生」『武蔵野美術』104号、1997年3月、pp. 4-9。
- 「冷遇される外国語教育」『日本の大学どこがダメか』（安原顯編）、メタローグ、1994年、pp. 124-127。
- 「内発的動機と持続する好奇心」『外国語上達法』（安原顯編）、メタローグ、1994年、pp. 186-189。
- 「最高の往生術は、自分の最良部分を残すこと」『私の死生観』（安原顯編）、メタローグ、1994年、pp. 204-207。
- 「ずいひつ：ムンクの「叫び」騒動に思う」『季刊アーガマ』阿含宗出版社、

- n° 132 : 1994年秋号、pp. 4-5。
- 「作品はどのように書かれたのか」(コラム「書きたい本、出したい本」)『出版ニュース』1994年9月下旬号、p. 25。
- 「草稿読みの苦楽 — 『「失われた時を求めて」草稿研究』余滴』『リテレール』8号、メタログ、1994年3月、pp. 146-149。
- 「メダンのゾラの家を訪ねて」『言語』大修館書店、1993年4月号、pp. 2-3。
- 「パリ国立図書館の思い出」『以文』35号、京都大学文学部、1992年、pp. 19-22。
- 「ルネ・ラリックとその時代」『現代の眼』450号、東京国立近代美術館、1992年5月、pp. 2-3。
- 「ワイルドとブルースト」『ユリイカ』特集オスカー・ワイルド、1990年5月、pp. 206-207。
- 「イメージの狩人 澁澤龍彦」『流域』24号 (été 1988) 青山社、1988年、pp. 10-15。
- « Les proustiens de l'École japonaise », *Le Magazine littéraire*, "Proust", n° 246, 1987, pp. 58-59.
- 「『失われた時を求めて』のプレイヤッド新版」『ユリイカ』総特集ブルースト、1987年、pp. 155-157。
- 「フランスの新しい日本文化観」『新潮』新潮社、1986年8月号、pp. 170-171。
- 「バルベール・ドールヴィイとノルマンディーの伝説」『季刊ソムニウム』3号、エディシオン・アルシーヴ、1980年。

VII. 書評

- 「Junji Suzuki, *Le japonisme dans la vie et l'œuvre de Marcel Proust*, Keio University Press, Tokyo, 2003.」『ジャポニスム研究』第24号、ジャポニスム学会、2004年11月、pp. 27-29。
- 「川中子弘『ブルースト的エクリチュール』(早稲田大学出版部、2003年)」『文化論集』第24号、早稲田商学同攻会、2004年、pp. 129-133。
- 「テキストの深層をめぐる旅 — 松澤和宏『生成論の探究』を読んで —」『文学』岩波書店、2003年11-12月、pp. 201-206。
- 「Michel Schneider, *Maman*, Gallimard, coll. « L'un et l'autre », 1999」『仏文研

- 究』32号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、2001年、pp. 177-179。
- 「真屋和子 *L'« Art caché » ou le style de Proust*、慶応大学出版会、2001年」『ラスキン文庫だより』、2001年9月1日、pp. 13-14。
- 「プルーストの「生の本質」を求めて（湯沢英彦『プルースト的冒険 偶然・反復・倒錯』水声社、2001年）」「『ふらんす』白水社、2001年6月、p. 81。
- 「プルーストを通して人生の味を知る一冊（アラン・ド・ボトン『プルーストによる人生改善法』畔柳和代訳、白水社、1999年）」「『ふらんす』白水社、1999年5月、p. 96。
- 「芸術と生の響き合うプルーストの宇宙（牛場暁夫『マルセル・プルースト「失われた時を求めて」の開かれた世界』河出書房新社、1999年）」「『図書新聞』、2000年3月4日。
- 「小倉孝誠著『〈女らしさ〉はどう作られたのか』法蔵館、1999年」「『図書新聞』、1999年9月4日。
- 「中川久定『啓蒙の世紀の光のもとで — デイドロと「百科全書」』」「リテレール』11号、メタログ、1994年冬、pp. 94-97。
- « Jean Milly éd., *Albertine disparue* [édition intégrale], Champion, 1992 », *Revue d'Histoire littéraire de France*, mars-avril 1994, p. 361.
- 「馬淵明子『美のヤヌス』」「文化会議』285号、1993年、pp. 32-34。
- 「海野弘『マルセル・プルーストの部屋』 プルーストを通して見た世紀末の世界」『リテレール』4号、メタログ、1993年春、pp. 128-133。
- 「明快なプルースト像 鈴木道彦編・訳『失われた時を求めて』抄訳版」『流域』32号（été 1992）青山社、1992年、pp. 11-12。
- 「戦慄にも似た背徳的な楽しみ 澁澤龍彦訳『サド侯爵の手紙』」「ちくま』204号、筑摩書房、1988年。
- 「プルースト訳・注による『胡麻と百合』の復刊（コンパニオン編）について」『仏文研究』18号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、1987年、pp. 223-224。
- 「シャルダンの眼 保莉瑞穂『プルースト・印象と隠喩』」「みずゑ』美術出版社、1982年冬、pp. 126-127。

VIII. 新聞・月報 その他

- 「『色の音楽・手の幸福』— ロラン・バルトのデッサン展 —」京都大学総合博物館ニューズレター、n° 17, February 2004、pp. 2-3。
- 「仏小説家プルースト作品の謎に迫る」読売新聞、2003年12月1日夕刊。
- 「推薦文：新庄嘉章訳『ジッドの日記』 輝く原石を見つける楽しみ」日本図書センター、2002年。
- 「推薦文：雑誌『ル・リール』復刻」本の友社、2002年。
- 「日本とフランスの「プルースト現象」」毎日新聞、2001年6月6日夕刊
- 「文化 批評と表現」欄。
- 「ことばの手品師」『ジュール・ルナール全集』第12巻月報14、臨川書店、1998年、pp. 1-3。
- 「スリジー・ラ・サル」鈴木道彦訳『失われた時を求めて』第4巻月報（「プルーストの手帖」4号）集英社、1997年、pp. 16-23。
- 「テキストの舞台裏を読む」『芥川龍之介全集』第22巻月報、岩波書店、1997年、pp. 6-10。
- 「推薦文：異文化交流の源泉 世紀末雑誌『コスモポリス』復刊」紀伊国屋書店、1997年。
- 「自著を語る —『対話と肖像 — プルースト青年期の手紙を読む』」京都大学新聞、1995年2月1日。
- 『単行本・文庫本ベスト3 <1994>』リテレール別冊8、メタログ、1994年、p. 8。
- 『私の好きなクラシック・レコード・ベスト3』（安原顯編）、メタログ、1994年、p. 104-105。
- 「時代を問う（2）—文学— 薄れる従来の枠組み 伝記・評伝復活の現代フランス」京都新聞、1994年10月14日朝刊。
- 「色彩の魔術—「絢爛たる夜会服の世界—パリ・オートクチュールの150年」を見て」京都新聞、1994年6月11日朝刊。
- 「乱雑よりの脱却 —「超」整理法の効果」京都大学新聞、1994年6月1日。
- 「水曜フォーラム 流れ出す書物」京都新聞、1993年12月29日朝刊。
- 「プルーストとサン・マルコ洗礼堂の記憶」井上究一郎訳『失われた時を求めて』プルースト全集第9巻「逃げ去る女」月報、1988年、pp. 5-7。
- 「フランスの旅行案内書（項目「旅行のための事典」1）」『事典の小百科』

- (紀田順一郎、千野栄一編) 大修館書店、1988年、pp. 13-19。
「フランス文学の現況と翻訳・研究 '87」『文芸年鑑 昭和六十三年版』
新潮社、1988年、pp. 143-145。
「ブルーストの新しい素顔」朝日新聞、1988年5月16日夕刊。
「フランス文学の現況と翻訳・研究 '86」『文芸年鑑 昭和六十二年版』
新潮社、1987年、pp. 142-145。
「ブルースト年譜」『ユリイカ』総特集ブルースト、1987年、pp. 289-325。
「フランス幻想文学の開花 — 1830年代における大作家たちの初期作品を
めぐって」『世界幻想文学大系』第18巻月報、国書刊行会、1979年、pp.
7-12。

付 記

この業績一覧に掲載された著作(単著・共著・編著)、個人訳書、研究論文、エッセー・対談、書評、新聞・月報その他については、その全てが、オリジナルまたはコピーの状態で京都大学フランス文学共同研究室に所蔵され、閲覧可能となっている。

principalement des chapiteaux et des mosaïques ; dans le second, les balustrades, les arcs des fenêtres et des archivoltes suivant différents ordres successifs. On supposant dif

notogique : 1° ~~selon~~ en pierre solide décrite 2° en pierre ajourée ^{en} une suite de C. est ce balun élétra par Ruskin qui ~~permet~~ qui a inspiré ~~l'expression~~ l'expression de Perrot : [travertin] 3° composée de petites colonnes soudant la surface horizontale. Or le palmier Cn. a cette prouté en :

I. * puis un caravate ~~(sic)~~ à qui s'on balcon fait monter si haut sa < Blanche > cravate de dentelles < séculaires* > qu'il leur cache presque entièrement son visage de marbre rose : [?] Contarini Fasan. ¹⁹ (40555° = 56°)

^{NOTES}

comme d'habitude dans ce livre de ~~Perrault~~, du palais-Monengo^(*). Il est intéressant de voir l'éton-
nement que provoque ces deux verrous ne se comparant pas à leur ordre réel sur le gen-
darmes, mais comme dans le cas de Vittorienne de Paris à Balbec, de déposer la
canal. Car, au Pont de Rialto à la place de Saint-Marc Piazzetta, on voit successivement ils sont si dans l'ordre
suivant : Monengo, Foscarini, Dario et Contarini-Fasani. Il n'est pas exclu que l'écrivain veuille, tout
un autre suivant (du Pont de Rialto à la place de Saint-Marc) : Monengo, Foscarini, Dario et Con-
tari-Fasani, tandis que l'écrivain nomme, non sans hésitation, successivement Dario, Monengo,

it dans les livres
Ils sont
ces. Les trois cer

Note 1. Le premier type est en pierre solide décorée. Le troisième se compose de petites colonnes soutenant la rampe horizontale. Pietro ~~de~~ la chap. VII. §107-19.

2. Ibid., §18. ~~est~~ ^{est} ~~les~~ ^{les} ~~planches~~ ^{planches} dessinées par ~~Ruskin~~ ^{Ruskin}. Voici la note sur Contarini Fasani dans l'Index vénitien : "La plus riche œuvre dogothique de Venise au XV^e siècle, mais remarquable plutôt par ses richesses que par son perfection du plan. Ce palais méritait une attention particulière, en ce sens qu'il dévie dans quelle mesure la sculpture gothique a pu accorder de la beauté et de la distraction à une si petite demeure, insi- gnifiante". Dans un article anglais est paru à cet égard une critique : il dit que le ~~démontre~~ ^{démontre} l'accusait de "manque de proportion" ; en réalité, il n'y a aucun espace à cet endroit du canal pour une plus large maison et puisque le constructeur voulait rendre les chambres les plus agréables qu'il possédait, il donne à ses fenêtres et à ses balcons une dimension modérée pour ceux qui voient à travers ~~elles~~ ^{elles} ou se mettent sur eux, on fait ainsi peu de cas des "proportions" ; (...) malgré sa petitesse manifeste, cette maison n'est pas moins l'un des sommets les plus nobles des monuments du Grand Canal. Sa destruction serait une perte aussi grave que celle de l'église de la Salute elle-même."

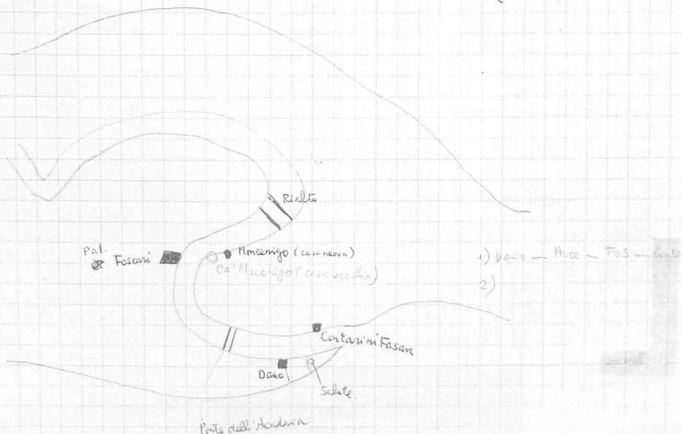
antique à Venise,
quinzième siècle,
au plan. Dans
dans quelle mesure
trois ~~combien~~ ^{combien}
l'ornementation demeure,
anglais sur les
; la fait est que
maison ~~est~~ ^{est} que
mais
ses fenêtres et ses
x et de ~~maison~~ ^{maison}
maison se met
à son sommet le plus
se cache de l'église
dessine ce palais

Note 2 bis. Dans l'appendice 6 de ce volume, Ruskin explique ces ornements muraux.
3. Cf. l'Index vénitien.

4. On dit que
4. Il existe dans Venise au moins six palais qui portent ce nom. Ils ont été construits par les Mocenigo entre XIV^e siècle et XVIII^e siècle (Venise au Platon, Joël Guénot, 1971). Celui qui figure dans l'Eglise Trincato et Umberto Franzo, la même citation semble désigner la "casa vecchia" ou la "casa nuova", les plus fameuses, qui se situent l'une près de l'autre presque en face du palais Foscarini.

et les Mocenigo
l'un d'eux il s'agit
il est désigné
du palais Foscarini.

II. Je reconnais avant que le gondolier ne le montre le petit palais Contarini Fasani, son visage rose presque caché par les hauteurs à qui son balcon fait monter sa haute sa ravissante cravate de dentelles qu'elle cache presque son même visage rose.
(f. 55v°)



VOYAGE DE PROUST		
1888	sep?	Vacances de famille Proust à <u>Illiers</u>
1890	6 sep.	Marcel Séjourné à Dieppe
1895	sep.	Marcel à <u>Sales-de-Béarn</u>
1896	automne	<u>Illiers</u> , (à succéder au de late Amet)
1899	sep.	à <u>Ostende</u> chez les Finalet
1890	sep.	en permission à <u>Calvary</u>
1891	sep.	<u>Calvary</u> (v. <u>Cahin</u> de M ^{re} Proust)
1892	14 août	<u>Trouville</u> chez les Finalet
1893	août	3 semaines à <u>Saint-Moritz</u>
	fin août - début sep.	une semaine au <u>Lido</u> de Gênes à <u>Erice</u>
	6 sep.	<u>Trouville</u> , hôtel des Roches-Noires
1894	9 mai	une fête de M ^{re} Séjourné à Versailles
	5 août	voir M ^{re} Séjourné à Versailles
	11 août	sa première avec A. France à Versailles
	18 août	part pour le château de <u>Reveillon</u> , séjour d'un mois
	14-15 sep	à <u>Trouville</u> avec sa mère (Hôtel du Rocher Noir)
	25 sep	retour à Paris
1895	juillet	1 ^{er} séjour à <u>Kreuznach</u>
	10 août	chez M ^{re} Lemaire à Dieppe avec Reynaldo
	}	* excursion à <u>Apparville-la-Petite</u>
	30	* excursion à Versailles
	4 sep.	<u>Boile-Isle</u> - au Mer chez Sarah avec Reynaldo
	6 sep	<u>Beg-Meil</u> (Hôtel Fernand)
	}	(rédict. in de JS)
	29 oct.	
	31 oct.	au château de <u>Reveillon</u>
1896	8 août	part avec sa mère pour le Mont-Dore
	~	
	19 octobre	s'installe à <u>Fontainebleau</u> , pour travailler, à son roman.
	~25 ou 26	
1897	fin mai la mi-août ~9 sep.	accompagne sa mère à <u>Kreuznach</u> (2 ^e)
	automne	Veatman l'accompagne à <u>Dieppe</u> .
1898	octobre	Premier voyage en Hollande, à <u>Amsterdam</u> pour l'exposition de <u>Reinhardt</u>
1899	septembre - octobre	à <u>Erice</u> (Splendide Hôtel) Thom. Gouine v. octobre. Amiens 1 ^{re} visite?
1900	janv.	<u>Rouen</u> , parle avec le sacristain de Saint-Ouen
	mai	séjour à <u>Venise</u>
	13 octobre	part pour <u>Venise</u> (14 oct. signe : l'île San Lazzaro)
1901	24 août	Versailles chez la Nathan
	30 août	annonce à aller à Montreuil et à Laon avec R. de B. Illy
	7 sep.	déjeuner à <u>Amiens</u> . L'après-midi à <u>Abbeville</u> ,
	6 ou 13 sep.	<u>Chantilly</u> - <u>Illiers</u> , vendent croûtes M ^{re} L.

CSB (B. de Fallois) INDEX GÉNÉRAL

(sang IX - XI et finale)

[illegible]

46 v^o < Voir aussi dans le cahier noir sur Venise > ~~Soit pour Venise~~ t dain

plutôt pour Paris et Albertine. < décidément peut-être plutôt pour Venise > t dain

Souvent je rencontrais des femmes qui me plaisaient et ta chant je dans les d)
détours de la ville qui se resserrent (voir la phrase faite sur la place inconnue)

(111/628) 47 r^o je rencontrais deux filles du peuple qui // dans cette demi-obscureté me paraiss-
saient délicieuses ; j'avais envie de les arrêter ; ² déjà à Paris < suivre

47 v^o d'abord l'enclave page suivante ^{c)} // Enclave de la page antécédente : Déjà à Paris

je me représentais comme merveilleux la vie de ces passantes. Je voulais maintenant les arrêter, comme Albertine avait dû le faire souvent. Mais

comme une < tardive > habitude ^{qu'} nous rend douloureux un voyage pourtant jusqu'à séduisant pour notre imagination on arranger cela avec la page au

dos. Pourrais joindre à cela excellente formule dans l'antépénultième verso (ou à peu près) du gros cahier bleu, ^{d)} < non c'est 8 vers^s avant la fin du

cahier > porte des personnalités entières ~~VOIR ENCORE CAPITAL~~ 3 doubles

47 r^o pages plus loin > // je pensais combien souvent Albertine avait dû en

arrêter de semblables. ² Cela, et j'y pensais maintenant sans aucune tristesse

mais j'avais voulu qu'elle pût être avec moi, ou ^{ou} moins lui raconter

< ensuite > ce que j'avais fait, qu'elle me raconte les aventures semblables²

qu'elle avait eues. L'image de En m'évoquant sans me le faire venir auprès

de moi son < gros > visage près du mien échangeant avec moi ces confidences

m'était donc mais comme je ne pouvais me marquer et je sentais qu' l'aven-

ture que se retranchait elle-même ce qui l'entendait ample et est de son

plus grand prix², l'aventure que j'aurais manqué je pourrais avoir me

faisait éprouver un sentiment non plus du tout de jalousie, mais de

a) Note sur toutes les pages
à l'arrière

b) C'est sans doute le cahier 55
c) Note qui se trouve tout en bas du feuillet

d) C'est-à-dire le Cahier 55.

RUSKINET PROUST à travers Jean Santeuil (1)

[Une chambre d'hôtel] 1^{re} publication: T&R. ("INÉDIT DE JS") JS554-6. [1897]

内容は JS 549-553 の Une petite ville de gamism へと相照しあり。これは Dominiere のエッセー。Proust が 1896 年 10 月に roman を書けるに Fontainebleau の l'Hôtel de France et d'Angleterre に泊ったときの実際の体験をもとにして (母への送付状)。Redactionist Kolb. Priée によると "une ville n'a texte n'est pas un roman" と書かれたもの (あるいは逆説) とのこと。この text は "quelques mois plus tard, au moins" とある。→ 1897 年。とくにラスキンの国詩は JS: ceramie a La Religion de la deatle の中の一節 (1897 年 3 月 18 日 Paris de Deux Mondes) が直接にヒントとなっているから。in date 前後であらう。 (同. p. 221-222)

« Ruskin dit que nous devons tout décrire, qu'il ne faut pas écarter tel ou tel objet car tout est poétique. »

KOLB. PRIÉE によると La Sizeranne の文章: « les artistes doivent aller à la Nature en toute simplicité du cœur, sans rien rejeter, sans rien mépriser, sans rien choisir »

但し 同 (1897 年 3 月号) には 'choix' の問題が 2 つあり (p. 192-197) の文章から逆推して Proust が 読んでいたのは定かではない。この article は 1896 年 contemplation の問題, Turner の画や ce que voir - の文, などに idee して。Jean Santeuil の Proust に最も適合する自然発生の T-26 のこと。Proust は 1897 年 3 月 18 日 2 月号の文章を讀んだことに 1897 年 2 月号の Proust の 1897 年 2 月号の文章を讀んだこと。

◆ Conclusions Provisoiries.

1. JS は Ruskin の影響は著しいが半分の程度ではない。つまり、Proust は 1897 年 3 月号の JS の文章を讀んだ。

2. JS は Ruskin の引用は決して Proust の 3 時期の美学と交差する点に止まり、その後の Ruskin の文章は決して Proust の文章とは異なる。JS の文章は決して Proust の文章とは異なる。JS の文章は決して Proust の文章とは異なる。

3. Ruskin の引用は決して Proust の 3 時期の美学と交差する点に止まり、その後の Ruskin の文章は決して Proust の文章とは異なる。JS の文章は決して Proust の文章とは異なる。JS の文章は決して Proust の文章とは異なる。

4. Renan. « On ne doit jamais écrire que de ce qu'on aime » (T&R の注) Sources d'enfance et de jeunesse. Jean Santeuil はまさにこの idee の incarnation と云われる。Redactionist Kolb. Priée によると "une ville n'a texte n'est pas un roman" と書かれたもの (あるいは逆説) とのこと。この text は "quelques mois plus tard, au moins" とある。→ 1897 年。とくにラスキンの国詩は JS: ceramie a La Religion de la deatle の中の一節 (1897 年 3 月 18 日 Paris de Deux Mondes) が直接にヒントとなっているから。in date 前後であらう。 (同. p. 221-222)

5. "Un jour on aime une chose qu'on n'aurait jamais aimée." この文では。Marcel は 1897 年 3 月号の文章を讀んだ。Proust が 1897 年 3 月号の文章を讀んだ。Proust が 1897 年 3 月号の文章を讀んだ。Proust が 1897 年 3 月号の文章を讀んだ。

6. S. E. 1897 年 4 月 Fontainebleau: 1896 (cf. correspondance avec sa mère, LI-LIX)

Cahier 3

- 1^{re} ① J'étais couché depuis une heure environ. Le jour n'était pas encore ~~travé~~ tracé dans la chambre à l'endroit où nous imaginons la commode, cette ligne au-dessous de laquelle court s'installer la fenêtre, que dans l'obscurité nous avons placée comme un soulai de Noël, près de la cheminée; le mur oblique que notre main croyait suivre l'obliquité le long du lit se redresse, ~~avant~~ ~~et~~ supprimant en face de nous la possibilité du balcon et de tout le reste de la maison, et ne laissant derrière lui qu'une cour et le lit tourne avec lui. ② J'avais envoyé au Figaro un article. Il y avait déjà ~~longtemps~~ quelques temps. J'avais corrigé les épreuves. (biffé)
- Parfois c'est une darté, reflet d'une fraise, sur la cuivre d'un meuble qui nous a oublié dans la feu étant trompés et que nous croyions déjà le jour au-dessus des rideaux de la fenêtre, nous triste que la rareté de lumière qui, dans la chambre d'un hôtel inconnu, trompe le malade; dressé sur son lit par une crise cruelle qui l'a réveillé, il voit cette lumière sous la porte et se dit c'est le jour, je n'entends pas encore de ~~la~~ bruit, mais bientôt tout le monde va se lever, on viendra me porter secours, je n'ai plus longtemps à attendre, et il compte les minutes. Bientôt la lumière sous la porte s'éteint et il retombe, se retrouve dans l'obscurité. ③ Il comprend, sa crise l'avait éveillé presque au moment où il venait de s'endormir. Il est minuit. Dans l'hôtel inconnu le garde de nuit

thème du malade dans un hôtel inconnu

1. Nous ~~reproduisons~~ ~~ici~~ la première allusion, ~~révisée~~, à l'article du Figaro.